

〈ヤンチャな子ら〉の学校から仕事への移行

——安定／不安定を分かち社会関係資本——

知念 渉（大阪大学）

1. 問題設定

1990年代後半以降、「フリーター」や「ニート」といった呼称に象徴されるように、学校から仕事へ移行をスムーズに果たせない若者の存在が社会問題化され、学術領域でも数多くの研究が蓄積されてきた（本田 2005 など）。そこで明らかにされたことの重要な知見の一つは、彼ら彼女らの仕事への移行過程において、社会的ネットワークが欠かせない資源となっているということだ。たとえば打越（2012）は、〈地元〉つながりを駆使しながらキャバクラと無認可マッサージ店を営むにいたった若年男性の生活史から、このままでは「食っていけない」境遇にあるなかで、彼が〈地元〉の社会関係資本を駆使して、その時々での職業選択を行っていることを示した。他にも「地元つながり」やネットワークに注目した研究は数多い。

これらの先行研究の知見をふまえれば、仕事への移行をスムーズに果たせない若者にとって、社会的ネットワークは、アイデンティティや精神面を支えたり、転職の機会を得るための重要な資源である。そうした若者にとって、社会的ネットワークは、仕事への移行期を生き抜くための「社会関係資本」（Bourdieu, 1983=1986）なのである。

しかし、このように、学校を経由することなく仕事へ移行していく若者たちにとって社会関係が「資本」とであるとすれば、それを持つ者／持たざる者の間には分断された状況があるのではないだろうか。多くの先行研究は、不安定な移行期を送るうえで重要な資源となっていることを指摘するにとどまり、資本の多寡によって分断された状況があるかどうかについてはあまり言及していない。

その点で重要な知見を提示しているのが上間（2015）である。上間は、風俗業界で働

く女性二人の職業生活の違いをネットワークに注目して描いている。すなわち、「彼女にリスクを呼び寄せてしまう」職場でつくったネットワークしかもたない真奈さんと、中学時代の同輩集団をベースにしたネットワークで、働き、生活するなかで起こる様々なリスク（客として来るヤクザへの対応とそこから別の店への転職など）に対応しながらなんとか生き抜いている京香さんの対比である。上間の研究は、これまであまり言及されていない社会的ネットワークの差に注目し、それを持つ者と持たざる者の間にどのように状況の違いがあるのかを描いた点で重要である。

とはいえ、なぜ真奈さんと京香さんとの間に社会的ネットワークの違いが生じているのかという点について、上間は言及していない。また上間は、京香さんの事例から、学校でネットワーク形成を行うことの可能性について示唆している。筆者もその可能性については概ね同意するものの、その一方で、学校はこれまでの「いじめ」や「スクールカースト」と呼ばれる現象を対象にした研究を参照すれば（鈴木 2012）、学校こそが、社会関係資本の多寡およびそれに由来する分断状況を決定づけているとも考えられる。

報告者は、これまで関西圏にあるX高校において、〈ヤンチャな子ら〉と呼ばれる男子生徒集団を対象にしたフィールドワーク調査を行ってきた（知念 2012, 2014）。2009年に高校1年生であった彼らは、その後X高校を中退／卒業し、様々な経路をたどって仕事に就いている。本報告では、彼らへの追跡調査から、彼らの移行過程を分析し、次の二つの問いに答えていく。学校を経由することなく仕事へ移行していく若者たちのなかで、社会関係資本を持つ者／持たざる者の間にはどのような分断された状況があるのか？ そし

て、何が社会関係資本を持つ者／持たざる者を分かつのか？

2. 〈ヤンチャな子ら〉の仕事への移行経路

2009年9月から2014年12月までに、〈ヤンチャな子ら〉がどのような移行経路をたどってきたのかをまず確認する。紙幅の都合で図は省略するが、彼らの移行経路を俯瞰してみると、14名中、留年をせずに卒業した者が3名、留年をしながらも卒業した者が3名、中退した者が8名となっており、X高校を中退した者が多い。また、卒業した者のなかでも学校経由で就職し、2014年12月までその仕事を続けている者は2名であり、ほとんどの者が、学校を経由しない形で仕事への移行を果たしている。

さらに重要なこととして、高校を卒業した者が安定して仕事へ移行することができて、中退した者が不安定な移行経路をたどっているわけでは必ずしもないということを指摘できる。高校を卒業した後、学校経由で就職した仕事を辞め、その後、仕事を転々としている者がいる一方で、高校を中退した後に3年以上、同じ仕事を続けている者もいる。

それでは、彼らの仕事への移行の安定／不安定を分かつものは何か。彼らへのインタビュー調査から明らかになることは、それが社会関係資本であるということだ。「プライベートはあまり知らない人」や「親戚」、「幼なじみ」など、どのような社会関係が活用されるかは個人によって違いがあるものの、彼らの多くが、社会関係を活用して仕事を見つけていた。確かに先行研究が指摘したように社会関係は労働市場を生き抜くための重要な資源なのである。

しかし、同じ社会関係を介した就職であっても、そのなかには分断された状況があった。すなわち、「地元のツレのオカン」「幼なじみ」といった比較的近い社会関係を介して相対的に安定した仕事を見つけることができたカズヤや中島と、「なんで仲良くなったか知らん」先輩や「ちょっと飲んでた」居酒屋の店員といったつながりで仕事を転々とし、不安定な移行をたどるダイやコウジの間にある分断である。

しかも、その分断状況は、彼らの家庭背景や学校経験と対応していた。非常に近い社会関係を通じて比較的安定した仕事に就いていく者の多くは、親世代からX地区に住んでいるため、親の社会関係も豊富で、小さい頃からの友人も多い。他方、「なんで仲良くなったか知らん」ようなつながりを介して不安定な仕事に就いていくダイやコウジは、家族で転々として中学時代にX地区にたどりついた、中学時代はいじめられていた等の経験から分かるように、親と自分自身の社会関係が乏しい。彼らの仕事への移行は、家庭背景→学校経験という経路で親から相続された社会関係資本に規定されているのである。

3. 本報告の知見が有する示唆

このような分析結果をふまえれば、学校から仕事への移行を分析する際、就職していく資源として社会関係を捉えるだけでは不十分で、その資源の多寡によって分断されている状況、さらにはその分断が生じる経緯や要因を把握しなければならないだろう。（インタビュー・データ等の詳細は当日配布する）

〈参考文献〉

- Bourdieu, P., 1983 =1986, "The Forms of Capital," trans. Richard Nice, chapter 9 in John G. Richardson (ed.), *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education* Greenwood Press, Westport, CN.
- 知念渉, 2012, 「〈ヤンチャな子ら〉の学校経験」『教育社会学研究』第91集, pp.73-94.
- , 2014, 「『貧困家族であること』のリアリティ」『家族社会学研究』第26巻2号, pp.102-113.
- 本田由紀, 2005, 『若者と仕事』東京大学出版会。
- 鈴木翔, 2012, 『教室内カースト』筑摩書房。
- 上間陽子, 2015, 「風俗業界で働く女性のネットワークと学校体験」『教育社会学研究』第96集, pp.87-108.
- 打越正行, 2012, 「建築業から風俗営業へ」『解放社会学研究』26号, pp.35-58.